蒼空の魔弾　対魔の剣
四つの訪問者

夜刀ノ神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日を境にその世界に次々と異変が起こった
初めにおこったのは異世界からの四人の訪問者
次に現れたのは空の世界からの訪問者
最後の異変は誰にでもわかる形で訪れた
海しかなかったはずの場所に大陸が出来上がり
更に各地に、オレンジ線が走る塔と同じくオレンジの線が走る祠らしきものが現れたのだ
さらには、異世界の英霊たちもが参戦する

これは魔弾の王と戦姫の世界で繰り広げられる、人と人ならざる者との戦いの物語である
注意※私は少なくとも魔弾の王と戦姫をすでに読んでいることを前提に物語を書いていきます、もしもまだ読んでないよ！
とい言う方がいらっしゃいましたらどうぞ、ブラウザバックして魔弾の王と戦姫を全巻読破してから、また来てください
まあ、読んでいなくても多少は楽しめるかと

目次

1、軍旗姫の目覚め　1
2、軍旗姫の操兵術　13
3、氷の盾　29
第4話　41
第5話　45
第6話　50

1、軍旗姫の目覚め

「うぅ、ん・・・うん?ここは・・・何処だ」
森の中男とも女ともとれる人族の男が一人目を覚ました
「こまったな、ここが何処だか全くわからん」
男は森の中の一つの気によりかかっていた
「不思議な感覚だ・・・なにかこう、記憶がごっそり抜け落ちているような
だが、覚えてる記憶は正常なんだよなぁ・・・何か有るとすれば学校からの帰宅途中に
光にのみ込まれたことなんだが・・・靄が掛かったように思い出せないな」
男が周りを見回すと同じ気に立てかけてある金属の棒と一冊のハードカバーの本を発見する
「本と金属棒か、とりあえず本だな・・・うむ表紙は全く読めない!英語っぽくもないんだよな
英語できないから、変わらないんだけどとりあえず開いてみるか」
本を開いた途端、今までしっかりと持っていた本がまるで手に吸い込まれるように消

え更に男の頭に
言葉が流れ込んでくる
≪無限図書館(アンリミッテッドライブラリ)≫≪無限ドレス≫
「図書館はいいとしてドレス?俺男なんだが・・・使い方はなんか知ってるな、なんでだ
まあ知らんよりはいいだろ、まずは気になるドレスから、うむうむこういう感じか」
男の脳裏にすさまじい量のドレスの見本が展開されるまるでこの世のすべてのドレスを集めたようだ
「説明にも、この世のありとあらゆるドレスに着替えられるらしいな・・・すばらしい」
「ドレスは素晴らしいのだが、着る俺がなぁ女装には興味があったし着るのには抵抗ないんだがなぁ
一応、脳内フィティングもできるらしいやっとくか、およよ?これは俺か?異世界の美少女とかじゃなくて?」
男がよくよく自分の四肢を見てみるとかなりほっそりとしており、お腹も以前は贅肉しかなかったのに比べ、無駄なお肉など一切ない
「これはいけるのでは?というわけでさっそく!」
似合いそうなドレスを選び男は具現化を実行する
「おお!おおお!美しい!鏡がないのが残念でならないな」

白を基調とした華やかなドレス、細い腕にはドレスグローブも装着されている
腰のあたりまで伸びた紫交じりの黒髪がよく映えている
「これが、着替え時間なしで着られるのはいいなせっかくドレスも着たことだし
これからどうなるか分からないが、何となく地球じゃない気がするから
お淑やかにいきましょうか、名前も以前の物だと淑女としてふさわしくないので変えましょう
なにがいいでしょうか・・・そうですねアルテミスこれにしましょう確か月の女神でしたね」
男改めアルテミスは今まで適当だった仕草を直し清楚なお嬢様を演じることにする
「さて次は図書館ですね、これもドレスと似たようなものですね読みたい本が無限に出せるのはいいですね、読書はいいものです色んな事に役立ちますから」
「次は金属の棒ですか・・・手に取らないことには始まりませんね、これは・・・」
さっそく金属棒を手に取るアルテミスだったがここで新たなことを発見する
「旗ですか、軍旗とも言えますかねぇ・・・あらまたですか」
【軍神姫の旗傘】
「旗傘？・・・こうですか」
脳内に浮かんできた知識に従い、手に取った旗を傘になれと念じながら旗尻で地面を

たたく
　するとそよ風になびいていた旗が金属部分に絡みつき更に金属部分も半分の長さになる
「・・・すごいですね？魔法ですかねぇ効果も強いです」

【軍神姫の旗傘】
　統率力が上昇、
　担い手の能力次第で際限なく味方が強化
　戦場に存在し旗を掲げるだけで味方の士気が上昇
　担い手は民の信頼を得やすく、また貴族王族などの信頼も得やすい
　一部魔法も使える
「さて準備は完了しました、森を出ましょうかもうすでにここが地球だとは思っていないですが
　まあ、いいでしょう地球での心残りはそんなにありませんし、未知の世界を探索できるのです
　これで心が躍らない者などいないでしょう、ではいきましょう」

「むう、森は歩きにくいですねさっさと広い所に出たいものです」
「おや、あの辺り開けていますね森から出られるのでしょうか行ってみましょう」

アルテミスは開けた場所に向かって進んでいく
「・・・気のせいでしょうか、向かう先のその先から血の臭いと絶叫、怒号が聞こえて来るのですが
しかたありません急ぎましょう」

森の出口らしき所から出ると真っ先に見えたのは今まさに野蛮で薄汚れたおそらく賊であろう者たちが

村を襲撃している様子だった
「はあ、いきなりですか」
「お頭ア！森から上玉が出てきやしたぜえ！」
「なに!?お前らいけ！」
「さっそく、気付かれてしまいましたか・・・私ってこんなに冷静おのじきでいられるんですね
命の危機のはずなのに全く焦りが着ませんね、何となく勝てる気がしますし、やってみますか」
「へへ、お譲ちゃん抵抗しなければ、傷は付けねぇおとなしく捕まりな！」
「下種ですね、どうせ捕まえたら凌辱する気でしょう、簡単には捕まりませんよ
掛かってきなさい」
「んだと!!!もう後悔しても遅いからな、女は美人なら手足ぐらいなくても高く売れんだ
ムオジネルには物好きが多いかんな!!」
言うが早いか、手に持った血塗られた鉈を振りかざしてくる
「（ムオジネル!?それってこの前呼んだ小説にそんな国が出てきたぞ?）
甘いですね、実力の差も測れないようでは」
旗に戻した軍旗姫の旗傘を巧みに操り賊の男を仕留める

「この旗はいいですね武器にもなるのですか、それにしてもはじめて人を殺したのに何の感情も湧きませんね
・・・・まあ所詮は賊ですし気にしないことにしましょう、それよりも賊を叩きだすことが先ですね
一人でやるのは厳しいですが、まあできるだけやってみますか」
今もなお悲鳴と怒号がこだまする村に駆け出す

「だっ、だれか！誰か!!」
「げへへ、助け何てこねえんだよ！おっさん、死ね！」
「あら、助けならここにいますよ、それと死ぬのは貴方の方です」
旗の穂先で一閃するだけで、賊の首が身体と別れを告げる
「あ、ありがとう、ございます」
「それでも、男ですか？男なら護りなさい」
「で、でも」
「一人でも、戦力がほしいんです村を無くしたくはないでしょう、
武器ならこの賊が持っていた物を使いなさい、護る覚悟ができたらついてきなさい
私は他のところに行きます」

そんな調子で一人また一人と村人を助けていくアルテミス

「ずいぶん、部下どもを手厚く歓迎してくれたようだなぁ譲ちゃん」
「歓迎したつもりはないのですが、貴方が頭ですか」
「そうだ！、お前を殺すのは惜しいがこれ以上被害を出すわけにはいかんからなぁ!!
死ねや!!」
「ええ、激昂したものほど分かりやすいものはないですね」
にて
数多くの部下を殺され激昂した賊の頭の大男が巨大な戦斧にて襲いかかってくる
「おらあああ！」
「直接受けたら即死ですね、旗で受けても旗が折れてしまうでしょうねッ」
叩きつっけるような一撃が襲うが敵の得物は戦斧動きが大ぶりだ
「そんな大ぶりで当たるわけないでしょう、隙だらけですよ」
斧が地面に刺さり引き抜くのに手間取っている大男の心臓を一突きする
「がっ、はっ・・・・」
「あっけなかったですね、さあ、残賊を始末するとしましょう

ああ、そうでした一人ぐらいは捕まえてアジトを聞きださないとですね」

残った賊を始末し一人を捕まえ拷問をする

「面倒ですね、複数拠点を持つそこそこ大きな賊ですか」
「あのぉ、村を救って頂きありがとうございます」
「貴方は・・・」
話しかけてきた男は、全身に血を浴びており手には短剣を持っている
「ああ、最初に助けた男性ですねその様子だと、大切なものは守れたようですね」
「はい！貴方に励まされたおかげで、妻と娘を助けることができました」
「そう、守れたのですねよかったです、この村の代表に会いたいのだけど」
「わかりました、村長のところにご案内します」
「ええ、お願いするわ

しばらくすると、他の家より少しだけ大きな家に到着する
「申し訳ありませんが、村長に話をしてきますので・・・」

「ええ、そちらの言いたいことは理解できるわ待っています」
「ありがとうございます、すぐに話してきますので」
言うが早いか男は家に入っていく
ほどなくすると、男が出てきて再び案内してくれる

「このたびは、わが村を救って頂き誠にありがとうございました」
そう言って頭を下げてきたのは、四十台ほどの男だった
「たまたま、通り掛かっただけですよ私がもっと早く着ていれば助けられる、命もあったでしょう」
「そんなそんな、殺された者たちには申し訳ないですが貴方が来てくれて本当に助かった」
そんな言葉を言いながらも顔は怒りで染まっていた
「ええ、殺された方たちの安寧を祈っています」
「ありがとう」
・・・・・
だいぶ怒りが収まってきたタイミングで切り出す

「これからのことですが」
「これから?ですか」
「ええ、賊の一人をご・・・こほん、聞きだしたのですが彼らは賊の一部でしかないようです」
「なんですと!?」
「私も、賊を皆殺しにしたわけではありません、逃げ帰った者もいるでしょう」
「まさか!」
「ええ、再び襲ってくる可能性がないとも限りません」
「そ、そんなどうすれば・・・・」
「このあたりに詳しくないのでわからないのですが、ここにも領主という存在がいると思うのですが」
「そ、そうだ!戦姫様にご報告しなけらば!」
「戦姫、ですか（もしかしてやっぱり?）・・・・こんな時で申し訳ないのですが この領地は何と呼ばれているんですか?」
「ご存知ないんですか!?まあアルテミス様にも色々と事情がある様子深くは聞きません ここはオステローデ公国と言う場所なのですが・・・・」
「（ほうやっぱりか）ありがとうございます、先ほどの話に戻りますが

その戦姫様に救援を出したとして、どれくらいで公都に到着しますか？」
「・・・・約十日です」
「十日ですか・・・厳しいですね、
ここで提案があります、賊のアジトを自分たちで潰しに行きませんか？」
「なっ、・・・・そんなことできるのですか？」
「できます、最低でも五十人確保できれば賊を殲滅する策が私にはあります
むろん、賊退治は希望者だけで構いません」
「だが・・・五十人で」
「賊に怯えて暮らすぐらいなら、賊を潰した方が早いと思いますが」
「わかった、今回のことで賊に怒りや憎しみを持っている者も多いのです
よろしくお願いします」
「ええお任せください、まずは一緒に戦ってくれる者を探さないとですね
村人を集めてもらえますか？」
「ああ、戦いには協力できないがそれぐらいは協力させてくれ」
「それと用意してほしい物があるのですが・・・」
「もちろん、我々に用意できるものであれば、ご用意します」
「では、お願いします」

2、軍旗姫の操兵術

村の襲撃から3日後
アルテミスは村人の有志を集め村人たちに訓練をさせていた
「(集まった村人は予想を超えた８０人・・・この村はそこそこの規模だったようですね
聞いた話だと襲われる前は４００人を超える村だったとか、生き延びたのは四分の三で３００人
これだけ、村人がいれば有志も集まりますか)」
「姐さん」
「はい、隊長何か御用ですか」
思考に耽っていたアルテミスを呼びもどしたのは先日アルテミスが最初に助けた男だった
更に、初めは迷っていた村人のなかで最初に志願したのも彼である
「・・・やはり私が隊長ではなく姐さんが隊長の方が・・・」
「これは、貴方達の戦いです私は皆さんに戦う術を説き導くのが役目です、ここはやはり村人の誰かが隊長をやるのが筋というものでしょう」

「理解は、できますが納得はできません」
「それより、私に用があってここに来たのでしょう」
「そうでした、この三日間でみんなはみるみる間に上達しています
それもこれも、姐さんのおかげです本当にありがとう」
「感謝の言葉は賊を殲滅してからにしなさい、本音を言うと
きちんとした武器をそろえたかったのですが・・・」
現状、村人の武器は賊から奪った物と木製で新たに作った物がある
奪った物は手入れも適当で、いい状態とは言えないし
木製の武器も所詮はその辺の木を使って作った武器だ見た目はお粗末なものだ
「後訓練させられるのは一日ですね・・・進軍前には休憩を取らせないといけません
戦場で動けなくなったらいけませんから」
「では、賊のアジトに向かうのは明後日ですか」
「そうなりますね、何事もなければですが
ああそれと、これをみんなに配ってください、戦場でお互いを見分けるのは大変です
から」
「青い布ですか、これを見えるところに付けさせればいいですよね」
「ええ、聡明で助かりますではお願いしますね」

「はい」
アルテミスは村長の家の屋根に座っている、理由は様々あるが今はいいだろう
隊長が屋根から飛び降りる
「(たった三日でずいぶんと身のこなしが軽くなった物ですね
私が教えたのは、基本的なことだけだったのですが・・・・これも復讐心が成せる技でしょうか・・・・)」
アルテミスの脳裏に必死に汗を垂らしながらも笑いあいながら訓練している村人たちの
様子が浮かび上がる
「(復讐心だけでここまでなるとは思えないのですが・・・これもこの旗のおかげでしょうか
考えても詮無いことです、今はできることをしましょう)」
旗傘を日傘代わりに兵法の思考を再開する、

翌日、この三日間村を包んでいた熱気はすっかり見えなくなっていた
しかし全くなくなったわけではない、むしろあえて抑えているという方が正しいのかも知れない

　そんな中、アルテミスは今日も屋根の上で思考していた、そこへ一人の村人がかけて来る
「(彼は・・・・確か斥候部隊をまとめる人でしたね、斥候部隊と言っても彼を入れて５人しかいないのですが
　まあ、いないよりはましでしょう、情報は重要です)」
「姐さん大変だ!!盗賊が!盗賊が１００人以上連れてこっちに来てる!」
「あら、想定より早いですねですが問題はありません、どのくらいの距離があるかは分かりますか?」
「あ、えっと・・・・二時間ぐらいだったはずだ見つけて観察したらすぐに戻って来たらしいから、正確とは言えないがその位だと思う!」
「それだけ分かれば十分です、おそらく奴らで全員でしょう叩き潰すのが早まっただけです」
「あ、姐さんは怖くないのか?」
「ええ、所詮は盗賊襲いかかってくるなら蹴散らすだけです」
「なんか、姐さんを見てるとあんなに焦っていたはずなのに心が落ち着いた」
「それは、よかった戦場で焦りは禁物ですから

では指示を出します、心して聞きなさい」
「はい！」

アルテシアはまず、隊長と副隊長を呼ぶように言う
それと同時に、休んでいるはずの民兵達を広場に集める

「行きなさい！、それと賊を発見した斥候の方にはよく労いの言葉をかけ
休ませなさい」
「はい!!」
しばらくすると、隊長と副隊長がやってくる
「姐さん盗賊が来たと聞きましたが」
「ええ、もうすでにここから2時間もしない位置まで来ているようです
賊は１００人こちらと２０人差がありますが、それも今の貴方たちなら
問題ないでしょう」
「姐さん、防衛線ですか?」
副隊長が訪ねて来る、彼は盾隊の隊長も兼任しているので気になったのだろう
「いえ、護りに数名残して打って出ます、そもそもこの村では広すぎて防衛に向きませ

ん」
「ですが・・・大丈夫でしょうか・・・」
「隊長、貴方がそんな気持ちでは、兵にも不安が広がります
胸を張りなさい、この三日間鍛えたのです問題ありません、存分に賊たちに復讐してやりなさい」
「「はい！」」
「斥候の隊長が兵を集めているはずです、広場へ向かいましょう」

三人が広場へ向かうと兵は全員そろっていた、各隊の隊長が総隊長へ報告する
「貴方が、総隊長です兵の激励は貴方がやりなさい」
「はい、みんな！聞いてくれ」
ざわめいていた兵たちが総隊長の言葉に耳を傾ける
「耳にしているかもしれないが、この村に盗賊が向かってきている」
総隊長の言葉に再び、ざわめきが戻ってくる
「だが！、我々は以前の戦うことのできない、ただの農民じゃあない！
この三日間姐さんに教えてもらった、技術、があるはずだ！
我らの後ろには護るべき愛すべき、家族がいる賊なんかに荒らされていいのか!?

いいはずがないだろう!、ならばともに戦おう、家族を守るために」
おおおおおおおおおおお!!
おおおおおおお!!
「完璧な、演説でしたお見事です」
「ありがとうございます、初めて姐さんにあった時のことを思い出しながら言いました」
「そうですか・・・皆!賊の頭の相手は任せなさい、我らに勝利の栄光を!!」

「「我らに勝利と栄光を!!」」

「隊長!!賊が姿を現しました!!」
それからきっかり2時間賊が姿を現した
こちらを発見した賊は隊列を組んでいるこちらを見て驚いたものの

構わず、怒号を上げながら突進してくる、賊たちに隊列という言葉はないのだろう
こちらは、前方に盾隊２５人、そのすぐ後ろに槍隊２０人更に槍隊の左右には剣隊２０人が十人づつ待機している
ちなみに右は完全に森になっておりかなり暗い
「盾隊！しっかり踏ん張りなさい、敵を止められるかは貴方達に掛かってます」
「槍隊！盾隊が止めた賊を付き殺せ！踏ん張りを無駄にするんじゃない！」
盾隊が抑えた賊を盾の隙間から槍隊が攻撃する、どちらの隊も武器が木製なのですぐに壊れてしまうが、すぐに後ろに置いてある
新しい武器を手に取り戦場に戻る
更に盾隊からはみ出した賊は剣隊問う名の賊から奪った武器を持った者たちが処理していく
「そろそろですね」
「はい、敵も完全に進軍が止まりました打つならここでしょう」
「それでは合図を送ります、火!!」
旗の能力により使えるようになった魔法で火の玉を空に向かって放つ
すると、次の瞬間右手の森から、賊に向かって次々と木の短い槍が飛来する
防具もなにも付けていない賊たちにとっては飛んでくるのがただの木の槍だったと

しても
　それなりの威力があるのだ、運の悪い奴は頭に直撃し運のいい奴でも足に刺さり動けなくなった
「すさまじいですな、このアトラトルでしたか簡単な作りの割によく飛びます威力もそこそこですし」
　そうアルテミスはアトラトルを持たせた遠距離部隊を森に潜ませていたのだ
　三日もあれば、狙ったところに命中させるのは無理だとしても、狙った範囲に飛ばすことはできる
　しかし、１００人にも及ぶ賊の前ではたった１０人から打ちだされる、木の槍で打ち取使者はれる
　数など、たかが知れていた
「やはり、思ったほどの戦果はあげられませんか一人当たり２，３人と言ったところでしょう」
「それだけ、打ち取れれば十分だと思うのですが」

「見なさい、こちらもかなり賊の数を減らしましたが、こちらの兵もかなり被害が出ています、負傷者はかなりの数ですやはり戦いに関してはあちらが優勢ですね
そろそろ、私も出ます指揮は任せましたよ」
「武運を」

「まずは手始めに、回復魔法をかけましょうか【我が旗よ、戦う友に癒しを】」
傷を負っていた兵たちの傷がみるみる、内にふさがっていく
その光景を目の前で目の当たりにした賊は恐れおののく
「傷がふさがっただけです、血は戻らないので気をつけなさい！」
「「おう!!」」
「敵の頭は・・・あそこですね」
アルテミスは明らかに大きな出来のいい剣を振っている賊を発見する
「貴方が、賊の頭ですね」
「なんだ？お譲ちゃんこんな戦場までお散歩か？死ね!!」
「死ぬのは貴方ですよ、（この世界に来てからこんなようなことしか言ってないような気が
しますね・・・まあいいか）」

大ぶりに振ってくる大剣をなんなく避け、何時ぞやと同じように心臓に一突き入れようとすると
それに気づいた賊は片方の手で強引に穂先をずらす
「(かなり強引ですね、ですがそんな適当な逸らしでは止まりませんよ)」
逸らされた穂先を今度は逸らした腕に添わすように持って行き首を一閃する
「・・・・!?」
「他愛ない」
あっけなく首と胴体は別れ賊は死に絶える
「お前らの、頭打ち取ったぞ!!」
「「「うおおおおおおお」」」
賊たちに動揺が広がっていく、そして一人また一人とやってきた方向へ逃げていく
しかし、そこへ賊たちのゆくへを遮る者たちが現れた
先頭にて騎兵たちを率いているのは白いドレスをまとった女性だった、まるでパーティーから抜け出したような
服装だが、その手には大鎌を肩に担いでいる、後ろではためく軍旗にも同じ漆黒の大鎌が描かれている

「戦姫様だ!」「戦姫様が助けに来て下さった!!」
「(ここは魔弾の世界で間違えなさそうね)」
戦姫らしき女性が指を鳴らすと後ろに控えていた騎兵たちが突然の敵に驚いて
固まっている、賊たちを蹂躙し始めた驚きから帰った賊たちだったが騎兵の速度に
追いつける訳もなく蹂躙されていく
「姐さん、私たちは行かなくていいんですか?」
いつの間にやら、近くまでやってきていた隊長が聞いてくる
「私たちが行っても邪魔になるだけよ、せいぜいこっちに来る賊を打ち取るぐらいね
それと遠距離隊も戻しなさい、戦いは終わったわ」
アルテミスが指示を出し、遠距離隊がもっどって来る頃には殲滅が完了していた
殲滅を終え隊列を整えた、騎兵たちが近づいてくる
それと同時に周りにいた村人たちが一斉に跪く、
「(おう・・・まあ私はいいか別にこの国の民じゃないし?)」
近づいてきた女性が馬上から話しかけて来る
「この村人たちを統率していたのは貴方でしょうか?」
「いいえ、私は三日前この村が襲われているところにたまたま遭遇した
そうですね・・・旅人です、この隊の隊長は彼ですよ」

「そうなのですか?、色々聞きたいことはありますがまずは隊長とやらに話しを聞いてからですね
　隊長とやら面を上げてください」
「は、はいえと、とえと」
「そんなに、緊張しなくても大丈夫ですよ」
「は、はいもうしわけ、ありません」
「では一つ目の質問です、あの旅人さんが言うには貴方が統率者だそうですが
　間違いありませんね」
「は、はい私が姐さんに総隊長を任せらました、この戦いは村の戦いだから
　村の者が隊長をやるべきだと」
「ふむ・・・次の質問です、かなり統率がとれているようでしたが貴方達は以前から賊との
　戦闘に備えた訓練をしていたのですか?」
「いえ、訓練を始めたのは三日前です我々に武器の使い方と戦術を教えてくれたのも姐さんです」
「三日前・・・・その言葉に嘘偽りはありませんね」
「もちろんです、私たち村人は戦姫様に感謝しているんです嘘など恐れ多いです」

「貴方の言葉を信じましょう、最後に賊と戦ったのは貴方達の意思ですか?」
「?質問の意味がよくわかりませんが私たちは村にいる家族を守るために戦いました
無論この中には、三日前に賊に家族を殺された者もいますが、そんな者たちも村を守るために戦って
くれました」
「なるほど・・・救援が遅れたこと謝罪します、そして無念にも賊に襲われなくなった命と
勇敢に賊と戦って命を落とした者にも祈りを」
「ありがとうございます」
隊長は死んでしまった者たちへの祈りをささげた戦姫へ深いお辞儀をする

「さて、旅のお方次は貴方へ質問させていただきたいのですが
よろしいですね」
「(これはお願いふうに見せかけて命令ですね)ええお答えできる範囲で
お答えしましょう」
「まず一つ目貴方は旅人と言いましたが、どこから来たのですか?」
「難しい質問をしますね、しいて言うならあの森でしょうか」

「答える気はないと」
「まあ、そうも取れますよね私の出身に関しては大勢がいるこの場所では到底話せることでは
　ないので、次の質問を」
「しかたありません、では次ですなぜあなたは通りがかった、何の縁もない村を救うために賊を退治し
　更に、賊の殲滅にまで手を貸したのですか?」
「見て見ぬふりをするのは、目覚めが悪いからですね手の前に助けられる命があるのです
　そして自分には、それを救う術があるこの答えで不十分ですか?」
「ええ、十分です最後の質問です、貴方はこれから向かう先が決まっていますか?」
「向かう当てさえなければ、路銀さえないですねどこかに私の能力を正当評価して雇ってくれるところは
　ないものでしょうか、雇ってくれさえすれば私が何処から来たか、旅の目的は何か答える気になるかもしれませんね」
　余りにも白々しいアルテミスの言葉に、笑みを浮かべながら
「いいでしょう、貴方の能力はさきほどたっぷり見せてもらいました

客将として招きましょう、待遇は相談ですが」
「ではお招きに、預かるとしましょう申し遅れました私アルテミスと名乗っています
どうぞよろしく」
「オステローデ公国　戦姫バレンティナ＝グリンカ＝エステスですよろしくお願いしま
すね」
これが、軍旗姫と幻影の幻姫の出会い

3、氷の盾

時を同じくしてジスタート王国、七戦姫の一人リュドミラ＝ルリエが
納めるオルミェッツ公国
その戦姫リュドミラは山にこもり気晴らしに狩りをしていた
腰には紅茶（チャイ）を下げ、竜具たるラビアスと弓を片手に
雪深き山を進んでいた
「!あれはキツネねこの距離だと・・・流石に当たらないわ」
リュドミラから狐までの間には目測で三百アルシンはあるこの距離では
矢を当てるどころか、届かせることも難しい
「・・・・・シッ」
慎重に近づき、狐との距離が百アルシンを切ったことろで矢を射かける
リュドミラが放った矢はキツネに吸い込まれるように突き刺さる
「よし・・・」
完全に息絶えていることを確認すると、突き立った矢を回収し狐を
回収する

「風がしのげて、水場が近いところに行きましょうか」
本来、水は積もっている雪を溶かせばいいのだが、なぜかこの時リュドミラは水場の近くに行くことにした
「確かこっちに、池があったはずね」
この山はリュドミラが子供のころから駆け回ってほとんどを知り尽くしている
この山で見たことがない物はほぼないと言っていもいいだろう
「・・・・なにかしらあれ？足？足じゃない!!」
うっすらと雪の積もった池に到着すると真っ先に目に入ったのは
じたばたと動く足だった、それも上半身が池に入っているため顔は見えない
そうまるで某犬神家の一族のように・・・周りには氷が厚く張っており状況がまるで意味がわからないが
「とりあえず、助けないと!」
引っ張っても、抜けないのでラビアスで氷を砕く
「よし、これだけ砕けば・・・よいっしょっと」
「ぷはぁ、はあ、はあ」
「貴方、大丈夫？」
「ああ、大丈夫じゃないなぜか寒さは感じないが、身体が冷えててやばい」

「少し待っていなさい、火をおこすわ」
「ありがとう、君が助けてくれたのか」
「ええ、よしこれで」
　集めた木に火口箱で火を付けると次第に燃え移り、かなりの火力になる
「おお、暖かい」
「それで？貴方はここでなにしてたの？」
「それがなぁ、気付いたらああなってたんだ」
「気づいたら？記憶がないとか？」
「うーん、記憶喪失ってわけじゃないんだこれを言って信じてもらえるかわからないけど
　恩人に、嘘はつきたくないから言うけど、俺は多分この世界の人間じゃない」
「なにを言ってるの？」
　意味不明なことを言う男にリュドミラは怪訝な顔をする
「まあ、そんな顔にもなるわなだが事実だ、そう言えば
　自己紹介がまだだったな、俺はノーマッドだ」
「リュドミラよよろしく」
「リュドミラだって!?」

「ど、どうしたのよいきなり大声をあげて」
「いや、すまないなんでもない、一つ質問なんだが
君は戦姫と呼ばれているか？」
「？ええ、そうだけれどなぜ異世界から来たという貴方がそのことを？」
「・・・俺の元いた世界には君が出て来る本があるんだ」
「？・・・よくわからないけど、貴方にしてみれば物語の世界に迷い込んで
しまったって言う、認識で合っているかしら？」
「そうだな、おおむね問題ない」
「貴方、行く当てがないのよね」
「そうだな、右も左もわからん」
「私の従者にしてあげたいところだけど、流石に無能を私の直属にするわけにはいかないわ」
「そうだろうな、ちなみに俺が得意なのは盾と氷を操ることだ」
「わかったわ、公都に戻ったら試験を受けさせてあげるわそこでいい成績を残せたら
貴方の待遇を考える、それでいい？」
「もちろんだ、助けてもらった上仕事までもらえるなんて
願ったりかなったりだ」

「それじゃあ、まずはこれを飲みなさい私が入れた紅茶よ温まるわ」
「ありがとう、頂きます・・・・うまい、身体の芯から温まる
　ここまでうまい紅茶を飲んだのは、初めてだ」
「そ、そうよかったわ」
「うん、うまかったごちそうさま」
「それじゃあ行きましょうか」
「ああ」

オルミェッツ公国公都公宮訓練場

ノーマッドはオルミェッツ兵の一人と対峙していた
「まずは一対一よ、両方とも刃は潰してあるけど、当たると骨ぐらいは折れるわよ
　始めなさい！」
　開始と同時に兵士が小手調べとばかりに上段できりかかってくる

「はあっ！」
「ここだ！」
それをなんなく受け流す
「次はこちらからいくぞ」
盾を構え突進する、無論兵士も黙って盾の突進を受けることはなく
左への回避とともに今度は下段から切り上げる
「（位置的にはガードできないと思って左へ回ったんだろうが関係ない）
せい、やあ!!」
ノーマッドは突進の形から盾を右に振りぬきその振動でそのまま右回転し
下段から襲ってくる剣をはじき返す、回転するのに掛かった時間はわずか一秒にも満たない
「ここ!!」
突然剣をはじき返された兵士はよろめき体勢を崩す、それを見逃すノーマッドではない
すかさず、盾による追撃をかける
まあそもそも盾しか持ってないのだから盾で攻撃するしかないそれも全身を護るようなタワーシールド

　ではなく、腕の肘あたりまでを護る三角形の小型盾だ
「ぐはっ」
「そこまで!!、勝者ノーマッド」
　周りで見ていた者たちから歓声が上がる
「盾一つであそこまで戦えるのね」
「ああ、俺はこれしかないからな使い方はなぜか知ってたが」
「次は一対多数ね兵士は前に出なさい、さっきも言ったけどこれはあくまで
　彼の実力を測るためのものよ、それでは両陣営構えて」
「(今回の相手は三人か・・・まあ魔法を使えば何とかなるか?)」
「初めっ!!」
　三人の兵士は、中央に立っていた兵士をはじめに突進してくる
「まずは受けようか」
　盾をまっすぐ構えながら、盾の能力を発動させる
「ふっ!　――――なっ」
　盾と兵士の長剣が接触する刹那、ノーマッドはすかさずバックステップで

衝突を防ぐ
そんなことをされた兵士は、初めから剣が当たる前提で突撃したのだ
かなりの前傾姿勢で、そのまま慣性に従い転倒してしまう
「氷!!」
「な、ななんだこれは!?」
ノーマッドが宣言すると同時に、転倒した兵士が正確にはその地面から凍りついていく
「くっ、動けん」
「・・・面白いことができるのね」
「「同僚の恨み!!」」
先ほどの兵士と同じく突進しようとしていた、兵士は
異変に気付き、今まで止まっていたのだが、気を取り直し剣を振ってくる
「（まずは一人、次はまとめて片付けるか）再びの氷」
唱えると、いつの間にやら濡れていた訓練場の床が氷に覆われていく
さながら、アイススケートのリンクのように表面はツルツルだ
そんな、足場を普通に歩こうものなら・・・
「なんだ!?おうわっ」「ぶべら」

もちろん転倒する
「なんだ、お前らそんなに地を這いつくばって、芋虫か何かか?」
そんな二人を尻目にノーマッドは靴底に氷で生成した刃で凍った地面を滑っている
ついでに、馬鹿にするのも忘れない
「このっ!!」「うわっ!!」
「確か、場外でも勝ちになるよな?」
一応リュドミラに確認するが、大丈夫なようだ
「じゃあ、いつまでも遊んでいられないしこの辺で終わりにするか、ほらよっと!!」
転がっている兵士に高速で近づき、渾身の蹴りをお見舞いする
摩擦の少ない氷上で急に一方から力を加えられたらどうなるか・・・まあもちろん吹っ飛んでいく
「一名戦闘不能、二名場外、よってこの勝負ノーマッドの勝利!!」
先ほどよりも、大きな歓声が上がる
「(兵士をぼこぼことは言い難いが倒したのに、素直な賞賛とは・・・)」
「ノーマッド貴方見かけによらず、強いのね侮ったことを謝罪させてもらうわ」
「気にするな、出身もわからないような人間を信頼しろって方が無理な話だ」
「そう言ってもらうとこちらとしても、助かるわそれとさっきの兵士を

凍らせたのはなに?見た感じは呪術って感じじゃなかったんだけど」
「そうだなぁ・・・(うむ・・・・これを教えていいかどうか悩みどころだな
このまま、ここでお世話になるなら話さなきゃならないだろうが・・・)
雇ってくれると確約してくれるなら話してもいい、働かずに飯が食えるのならなおいいが」
「働かずにご飯は無理だけど、貴方を正式に兵士として取りたてることは約束するわ」
「いいのか?そんなに簡単に決めて家臣たちが反発するんじゃないか?」
「武官ならここまでの能力を持った人間を放っておかないでしょう、問題は
文官だけど、貴方次第ね」
「それなら、いいんだが・・・仕方ないよろしく頼むよ
とくに行く先もないしな」
「そう!、それでさっきのこと教えてほしいのだけれど」
「なんと説明したらいいか・・・そうだな魔法って知ってるか?」
「えっと、ええ一応おとぎ話に出て来るアレよね」
「今はその認識でいい、それだ俺には氷を操る能力があるんだ」
「無から氷を生み出せたりするの?」
「流石に・・・できなくはないが俺の負担が大きいな

近くに水があれば、それだけ多くの氷が操れるようになる」
「あれ？でもさっき、地面を凍らせていたわよね？見た感じそれほど疲れているようには
見えないのだけれど」
「この盾にはな水蒸気を出すっていう能力があるんだ
そして実はすっげー疲れてる今にも倒れそう」
「水蒸気？やっぱり疲れてるのね」
「水蒸気ってのは・・・水が細かくなって空気中に浮かんでる状態だ
お湯を沸かした時上に白い靄が出るだろ？あれが水蒸気だ」
「なるほど、空気中の水蒸気を水に変えて地面を凍らせたのね」
「そう言うことだ、それともう休みたいんだが？」
「そうね、その前にあと一戦してもらうわ」
「は？もう採用は決まったんじゃないのか？」
「ええ、決まったわよ私が個人的に戦いたいの」
「それは、休んでまた後日でもいいんじゃ」
「私は、戦姫よそれなりに忙しいの、この機会を逃したら次いつ戦えるか分からないわ」
「はあ、わかった」

「それでよし、私もラビアスは使わないから安心しなさい」

「全然安心できねえ」

第４話

「構えなさい、初めから本気でいくわ」
「しゃーない、もうひと頑張りするか」
両者同時に得物を構える
勝負は合図無しに唐突に始まった
「はっ!!」
初めに動いたのはノーマッドだ先ほどから変わらず凍っている地面を滑りながら
急接近する
「せぇい!!」
急接近からの盾を攻撃を滑る地面で苦も無く手に持った槍でいなすリュドミラ
「マジか・・・」
いなすと同時に、リュドミラも動き出す
まるで、氷の上を動くのは馴れているかのようにとくに工夫もない
ブーツで氷上を滑っているのだ、ノーマッドと同じかそれ以上の速度で
「(しまった・・・リュドミラの竜具は氷を操れるんだった・・・)」

そこからはひたすらに、攻撃し弾き、攻撃し回避しの繰り返しである
その様子は、見事の一言で傍から見れば下手なフィギュアスケートよりも美しい舞いに見えるだろう
・・・戦ってる本人たちはいたって真剣なのだが
「(まずいな・・・俺には決め手がないんだよな、どうしたものか、あぶねっ、このっ)」
「このままでは、じり貧ねどうするの?こちらはまだまだ体力は残ってるわよ?」
「ご忠告どうもっ!それじゃあ次で決めさせてもらおうかなぁ!!」
「来なさい!」
「(できるか分からんが、やるっきゃねえ!)氷!!!」
戦闘しながら特定の位置に噴射していた水蒸気をとある形に凍結させる
「これは・・・円?」
「ただの円じゃねえ、魔法陣だ」
先ほどまで二人が戦っていた氷上に円が何重にも重なった魔法陣が氷で描かれていた
「こいつで、どうだ!!大氷塊!」
叫ぶと同時に、ちょうど円の中心にいたリュドミラの頭上に巨大な氷塊が現れる
「なっ・・・ふっ戦姫を舐めてもらっては困るわ!!」

素早く、槍で氷塊に十字型に傷を付けると、渾身の力で頭上の傷つけた氷塊の中心に槍を打ち込んだ
今度はノーマッドが驚く番だった
「なん、だ、と・・・」
打ちつけられた氷塊は見事に四つに割れちょうどリュドミラを避けるように地面にたたき付けられた
「はあー、もうむり動けん」ノーマッドはそう言ったきり倒れこんでしまう
「この勝負私の勝ちね」
「ああ、やっぱり戦姫にはかてんよ、むりむり」
「いくらラビアスを使わなかったとはいえ、私がここまで一般人に追い詰められたのは
はじめてよ、誇っていいわ」
「ああーそうだなーいい加減休ませてくれ、疲れた」
「・・・・仕方ないわね、誰か彼を新しい兵舎に案内しなさい」
「はっ」
「よろしくー」
ノーマッドは一人の兵に案内されて去っていく
「貴方は、彼のことどう思った?」

リュドミラは去っていくノーマッドの後ろ姿を見ながらやってきた
武官に聞く
「そうですなぁ、性格に問題はありそうですが実力は申し分ないどころか
あのような、盾の使い方をできる兵はいないでしょう」
「彼がここで働くのに不満を持つ者はどれくらいいるかしら」
「少なくとも、武官は問題ないでしょう戦姫様とあそこまで渡り合ったのです
その代わり嫉妬は絶えないでしょうなぁ、文官は・・・彼の能力次第ですな」
「彼ほどの人材を他へやってしまうのは惜しいわ何としても文官たちを納得させなきゃ
ならないわね」
「それほど、難しくはなさそうですがね」

第5話

アルテミスがオステローデに客将として招かれ一週間が経過していた
「戦姫様、ご報告いたしますアルテミス様は無事に盗賊の掃討を終え無事に帰還いたしました」
アルテミス本人からの報告ではなく率いていた一人を報告に寄こしたことにバレンティナは瞠目する
「・・・一応聞きますが本来報告するはずはずのテミスは何処に?」
アルテミスとバレンティナは呼び合うには長いからと愛称で呼ぶことにしていた
「それなのですが、行軍中に新しい戦術を思いついたとおっしゃり自分はこれを書きとめるために書庫にこもるから、報告をよろしくと・・・」
「はぁ・・・彼女はとても優秀なのですが自由すぎますね、私の夢を考えればとても、いい拾い物ではあるのですが」
「ティナの夢ですか、少々興味がありますね」
執務室のドアを開け、旗を肩に担いだドレスのアルテミスが入ってくる
「テミス一応聞きますが今までどこに行っていたのですか?」

「あら、こちらの隊長さんからお聞き気になっていないのですか?」
「報告は受けましたが、貴方は書庫に行っているのではありませんでしかか?」
「聞いているじゃないですか、ことのほか早くまとまったのでとりあえず来てみました」
「では、報告書の作成をしてくださいこれ立派な仕事のうちですよ」
「報告書ですか・・・ライ」紙の上に手をかざし一言唱えると掌に魔法陣が現れ、見る見るうちに、報告書が出来上がる
「・・・いつ見ても頭おかしいですね、書類仕事をこの速さで片付けるのは」
「見かけほど、簡単じゃありませんよ?文章の整理と書きこみ見直しを同時に行っているのですから」
「それが、同時にできる時点で頭おかしいと言っているのですが・・・」
「ティナお腹がすきました」
「食堂で何か貰ってきなさい、この時間ならパンの一つでももらえるでしょう」
「ええ、ではこれで失礼します思いのほか魔法を使うとお腹が減るので」
　アルテミスは入ってきたときと同じように執務室から出ていく
「えっと・・・さっきのは・・・」
「気にしたら負けです、深く考えてはいけませんああいうものだと思いなさい」
「そうします・・・・」

「ええ、下がっていいですよ」
「これは、夢に近づいたと喜ぶべきなのでしょうか、それとも・・いえ喜んでおきましょう
　そう言えば、近いうちにエレオノーラのライトメッリッツとブリューヌの戦争があるのでしたね争いの原因はよく覚えていませんが、テミスに様子を見に行かせるというのは一つの手ですね」

「おばあちゃま、お腹がすきました」
「またかい?あんたそんなに細いのによく食べるねぇ、ほら今日も来ると思ってサンドイッチにしといたよ」
「ありがとうございます、おばあちゃまのお料理はとてもおいしいので感謝が絶えません」
「気になさるな、好きでやってることだ、ごゆっくり」
　魔法を使い、お腹がすいてしまったアルテミスは食堂で食事を取っていた

「はい（しかし・・・魔法を使うとお腹が減るのは地味に厄介ですねお腹さえ満たせれば、魔法は打ち放題なのでしょうが・・・これ、食べてるもの何処に行ってるんでしょうね、いくら食べてもお腹が膨らんだ様子は見えませんし・・・まあ、おいしい料理をたくさん食べられると思えば、悪くないですね）」

しばらく無言で食べる

「（・・・・もう少しでディナントの戦いですか・・・）」

アルテミスは情報を集め自分がここへやってきたのは、ディナントの戦いの暫く前だということは分かっていた

「（ティナもライトメリッツが戦争をすると言っていたので間違いはないでしょうティグルブルムド＝ヴォルンに恩を売るのは後々の役に立ちそうですね・・早いうちにティナの夢をかなえる方法を見つけませんと・・・）」

アルテミスはせっかくお世話になっているバレンティナに恩を返したいと思っている、それと同時にバレンティナが玉座を狙っていることも、知っている

「（これほど、面白い体験はないでしょう読んでいた本の中に入っているのです、推しキャラの手助けをしたいと考えますよね別に、ティナを娶ろうとかそんな壮大な野望を考えているわけではありませんが、何より面白そうです、折を見てティナにディナント

に行くことを話しましょうか・・・その後はアルサスですかね伯爵は捕虜になってライトメリッツへ行くはずです、ふふふ」

この時のアルテミスはかなり悪い頬笑み顔になってなっていたのだが、近くに誰もいなかったため見られることはなかった

第6話

それは唐突に訪れた、
その日は、空を満遍なく覆った曇天今にも雨が降り出しそうな日だった
「ティナ私はディナントへ行きますのでそのつもりで」
「また唐突ですね、理由を聞いても？」
「面白そうだからです、その後ブリューヌへしばらく出かけますがまあ一年ぐらいで戻ってきますので」
「一年ですか・・・止めてもどうせ行くのでしょうから許可はしますが
どうせならこのオステローデに益の出ることをしてほしいですね」
「ええ、不利益にはなりませんよ、では行ってまいりますね」
オステローデからディナントは15日ほど掛かる、ディナントの戦いまでに
後ひと月もないので急がなければならなかった
「本当はティナに送ってもらえれば楽なのですが・・・」
もの欲しげな顔でちら、ちらとティナを見る
「・・・そんな顔をしても送りませんよ・・・・もうっしかたありませんね

行きだけですよ、帰りは自力で帰ってきてください」
「ありがとうティナ愛してますよ」
「はぁ、貴方に言われると冗談に聞えませんからやめてください」
アルテミスが男だということはティナには言ってある、知った時には驚いたようだが
もう慣れたようだ
ティナが竜技を使おうとした瞬間
突然の地鳴りとともに地面が揺れ始める、
「(地震ですか、結構揺れますね)」
「きゃっ」
さしもの戦姫様も、地震には慣れてないようで、
体勢を崩したところを近くにいたアルテミスに支えられて何とか体勢を整える
寄りかかられたアルテミスは旗を床に固定しティナを支える
「(こんな時ですが、ラッキーですね何処とは言いませんが自分のと合わさってふわふわですね)」
今のタイミングで解説するのもどうかと思うが、現在のアルテミスは男にも限らず胸部装甲が厚い
それはもう、はち切れんばかりに

「(しかもこの胸部装甲着るドレスによって変わるのですよね、本当に不思議です)」
「収まりましたか、ティナ大丈夫ですか?」
「え、ええテミスありがとう急だったものですから」
「それは良かった、ティナ城下町を見に行きますよこれだけの地震です
被害もあるでしょう」
「そうですね」
外に出た二人は愕然とする
町から、さほど歩かずに付くところに巨大な塔が建っていたのだ
その塔は表面が網上になっており入口らしきものも見当たらないあるのは表面にせり出している
足場のみだ
更に不思議なのは、網の奥にオレンジ色に光る線が走っている

「戦姫様!!アルテミス様!!」
「現状分かっていることを教えてください」
「はい、あの長い地震とともにあの塔は立ったようです」
「それは確かですか?」

「はい、この目で見ていましたから、それと中庭にあの塔に何処となく似た祠らしき
　物も確認されています」
「けが人は？」
「現在確認しております、ですが不思議なことに建物などに被害がなかったため
　死傷者はいないと思われます、詳細な報告は追って報告します」
「わかりました、領内の村に見回りを送ってください助けを求める村もあるやもしれま
せん」
「了解しました」
「どうしましたテミス黙りこくって塔を見つめて」
「ティナ遠見眼鏡を用意させてください、それから高い所に行きますよ」
「え？遠見眼鏡ですか？」
「いいから行きますよ、先に行くので後からついてきて下さい、一番高いところの屋根に
行きます」
「え、ええ」
　アルテミスは優雅に早歩きで屋根に上るのに最適なところに歩いていく
「（あれはおそらく、ゼルダの伝説に出て来る塔でしょう、それなら他の場所にも現れて
いるはず・・・

そして、あの塔が出てきたということは対魔の剣士がこの世界にいて最近になって目覚めた！）

いつも屋根に上っているところにたどりつき、軽やかな足取りで屋根に登っていく

一番上にたどりつくと、背後に突然気配が現れる

「急に駆け出してどうしたというのですか、はいこれ遠見眼鏡です」

「ありがとう、あの塔に見覚えがあったので」

「まさかあれも、それもテミスがやってきた世界の物語の中の物だというのですか？」

「ええ、とはいっても違う物語ですが以前に話したことがあったでしょう

緑衣をその身にまといその手には伝説の対魔の剣を携え、王国とその姫を救った時を駆ける勇者の物語を」

「あの、物語でですか!?」

ティナが瞳を輝かせながら聞いてくる

アルテシアは、暇なときにティナに前の世界の物語を語り聞かせていた

本や英雄譚と言ったものに憧れるティナはもちろん聞き入った、その中でも特に気に入っている

物語の一つが、ゼルダの伝説シリーズなのだ

「ああ、じゃなくてええ、まだティナには話したことのない話だったのだけれど・・・・

　やっぱりあった、それも、いち、にい、さん・・・・・八個ね全部で多分各公国と王都に一つずつですね」
「危険はあるのですか?」
「あれ事態に危険はないのですが・・勇者はあの塔と祠に転移することができるのです」
「まあ、それこそおとぎ話のなかのようですね」
「その転移を使える貴方がいいますか、まあ現状は放置で問題ないでしょう、災厄が動き始めれば
　何とかしなければいけないでしょうが」
「現状は放置でいいのですか・・・」
「ええ、彼は勇者です国家間の問題に頭を突っ込むことはないと思います、絶対とは言い切れませんが・・・
　　――――え゛?」
「いきなりどうしたのですか、そんなはしたない声を出して」
　アルテミスは、無言で遠見眼鏡をティナに渡し、とある方向に指を指す
「あちらを見ればいいのですか?・・・え?あれは・・・船でしょうかでも空を飛んでいるように
　見えます・・・とんでますね」

曇天の大空にはアルテミスが以前いた世界で言う飛空挺が飛んでいる
まるで巨大な青き竜が船を持ちあげ飛んでいるような外見、まさしく
「グランサイファー・・・・」
「え、あのグランサイファーでしょうか？大地が存在せずあるのは点々と浮かんでいる島しかない
世界を、飛び回る機空挺グランサイファーですか!?」
グランサイファーという名前に聞き覚えがあったバレンティナが聞き返す
「ゼル伝の次はグラブルですか・・・面白いことになりそうですね、あれはおそらくグランサイファーで間違えないでしょう」
「次から次に何が起こっているのやら・・・」
「ティナ彼らが敵に付くと厄介です、先日話した通り彼らの団結力は異常です
早々に友誼を結んでおいて損はないと思います、それにここから先はおそらく戦乱の世に
なるでしょう、彼らと友誼を結んでいれば、少なくとも我らの前に障害として立ちふさがる
なんて、最悪のケースは免れるかと」

「つまり彼らのもとに真っ先に辿りついておいた方がいいと
　あそこまで虚空回廊(ヴォルドール)届くでしょうか・・・」
「そればかりは本人しか分かりませんね・・・」
「んーー意外とできそうですね、やってみますか【虚空回廊】」
　手に持ったエザンディスを円を描くように手元で一回転させる
　するとエザンディスの刃が通ったところから黒い膜のような渦巻く円が出現する
「出来ましたね、行きましょうかテミス」
　先ほどアルテミスの後ろに唐突に姿を現したのもこの竜技のおかげだった
「ええ」
　何の躊躇もなく膜の中に入っていく
　膜から出るとそこは、遥か空の上だった